

重度・重複障害児を教育して何になるか、あるいはそういう非常に重い障害の子供達を教育する可能性があるのか、ということがこのシンポジウムの一つの問いかけである。確かにこの問題こそ私の長い間の教育実践のなかでいつも根本的に問われ続けており、教育の出発点ともいえる。その意味ではこの問題に対して明確な解答を出せないのだから、重度・重複障害児の教育は今日まだ始まっているとはいえない。どうやってスタート台に立とうか、あるいは果たして立つことができるのか、と苦闘している時期ともいえる。学校教育としての重度・重複障害児の教育は現在、ほんの形ばかりが始まっただけで、とても私達は重い障害の子供達を自由に育てることができるという自信をもつにはほど遠い現状で、しっかりした教育の基本的立場、内容・方法を確立していない。したがって、年々重度化している教育の現場において、この子供達を教育することはまだ無理なのではないか、いつも子供に振り回されてしまって自分が何をやっているのかわからない、と思ったとしてもむしろ当然であり、あせって即効性のある方法を求めれば、それは強制的、機械的、固定的な学習となって、子供のためばかりでなく、私達自身のためにもならない。

重複障害児教育の今日的な課題はまず教育のスタート台にたつために、あせらず、ゆっくりと、より本質的、より基礎的に教育の意味を問い直すことであり、人間行動の成り立ちの原点から、子供の真の生き生きとした姿を見出し、教育の内容・方法を根本的に改善することである。

最近重複障害の一青年にしみじみと教えられ、感動したことがある。それは昭和 56 年 9 月 27 日、日本盲ろう者を育てる会第 4 回全国大会（会長 坂田道太）が横浜国立大学附属養護学校で開催され、午前中の体験発表において、筑波大学附属盲学校高等部 3 年の盲ろう者の F 君の話聞いたことである。

彼は 4 歳のときに、こうか性眼炎のために片眼を摘出し、9 歳で牛眼で失明し、それから徐々に耳が悪くなり、14 歳で片耳が失聴、そして 17 歳でもう片方の耳も聞こえなくなり、今年の初めには完全な盲ろうになった。片眼一両眼一片耳一両耳の順で失官し、とうとう視聴覚を失った彼は本来大変明るい子であったが、さすがに落ち込んで、本年 2 月にはあまりものも言わなくなり、もう学校に戻れないと考えて、先生や友だちの見舞いも断り、とても沈んだ時期があったという。ところが、母親とのあいだで指点字をコミュニケーションの手段として開発、確立し、本年 4 月には学校に復帰して以前の明るさをとり戻し、現在、大学進学希望にふたたび燃えている。彼の体験発表のなかで、おおよそ次のように述べている。

「僕が盲ろうになって失ったものは数知れずあると思うんですけども、また得たものも少なからずあると思います。その一つには、僕が人の心というものを肌で感じられるようになり始めていることだと思います。外見的な特徴やししゃべり方などに左右されること

がないので、純粋に相手の言いたいことが伝わってきます。また、指点字を使うようになって、人間の手というものがとても大事なもので、意外にその人の性質を表すものだということがわかってきました。僕の障害のゆえに本当の友達をというものを見分けることができたような感じがします。そうしたら彼ら（学友）は僕に対して話してやるという姿勢でなく、僕と話すことじたいを望んでくれます。学校へ戻った当時は不安のなかで悶々としていた僕なんですけれども、こうした彼らの存在がどれほど嬉しかったかしれません。

次に今後のことについて話します。僕が今考えているこれからの人生の最大の目的は障害という意味を考え続けていくことです。当面の目標は大学に進学することになりますが、それは将来の職業の可能性を拡大するという表向きの理由があっても、その本質的な動機は、健常者のなかで自分で障害を見つめ直すということにあると思います。よく障害者でも努力すれば健常者と同じように生活できるんだということがいわれます。しかし、この言葉の裏には障害者が健常者に対してマイナスの存在であるという前提が含まれているように思います。障害者が努力しなければ生きていけないのは事実ですし、それは非常に大事なことと思いますが、何もそれを過大評価することはないと思います。健常者のなかにも、僕らよりもっともっと努力して生きておられる方が沢山いると思います。それに僕らが努力を重ね、たとえ外見的に健常者と同じような生活を営めたとしても、それには大して意味がないように思います。なぜなら、僕らが必死でたどり着いたゴールは、健常者のスタートラインなのですから。僕らにとって一番大事なことは自分の障害を通して、またそれによって生まれてくるいい知れぬ心の痛みを通して、どのようにものごとをとらえていくのか、ということだと思います。僕ら障害者が社会的にみて、生産性や行動力において健常者に劣っていることは自明の事実です。僕は盲ろう者です。目はみえません。耳が聞こえません。しかし、それは逆の意味で、うわべにとらわれがちな社会の価値判断の基準にしばられにくいということをも意味していると思います。僕らが自分で感性をみがき、ものごとに対する本質的価値基準をもって生きていくとき、初めて僕ら障害者が真の意味で社会の一員になれると思います。僕は、我々障害者が、障害者でもできるでなく、障害者だからできるという存在であることを、自分自身に、また社会に問いかけ続けていきたいと思います。」

彼の発表を聞いて、私は愕然とした。54歳の私より、18歳の彼のほうがしっかりしているし、ずうっと人生を見とおしている。彼は、盲ろうになってかえって世界がよく見えてきたこと、周囲の人の真の姿がわかってきたこと、自分自身の価値判断の基準がより本質的になってきたこと、をサラリと話した。確かに、障害を受けることはその人にとって不幸なこと、不便なこと、情けないことと思われがちだが、それによって得るもの、深まるもの、増すものを考えないのはあまりにも一方的ではなかろうか。昔、西片町の陋屋<sup>ろうおく</sup>で、盲ろう児と合宿していたことを思い出す。成子さんと散歩に行くと公園で休んでいると、よく老婦人に声をかけられ、この子はあなたのお子さんですか。不憫ですね。お気の毒ですね。と同情され、いやな気がした。また、盲児を見て、見えないからこの世の楽しいこ

とがこの子にはわからない。なんとか見せてやりたい。と、したり顔で言う人を見て、不快な思いをした。また、障害者をもつ親が子を殺し、新聞に同情的な記事が載ると、いい知れる怒りを覚えた。障害者が普通の人と伍して、追いつけ、追い越せ、という考え方も、障害を克服し、補償するという言葉も大嫌いである。障害があろうとなかろうと、その人自身が地道に生き、充実した生をまっとうすることが大切なのである。おなかですいて働いて得たお金でパンを食べ、満足感を味わうよりは、存在そのもののなかにある真実をよりよく見とおすことによって、生の充実感を味わうほうが大切である。

そう考えると、どんなに重い重複した障害でも、決してマイナスではない。むしろ障害が重く、重複していればこそ、それを契機として、かえって教育とは何か、人生とは何か、人間存在そのもののあり方、つまり、本当の生の意味が明確にならなければならない。ただ障害の重さやそれに伴う自傷行為や問題行動の解決法ばかり話し合われても何もならない。今日の障害児教育が障害のもつ本当の意味について十分に考えているであろうか。そして、彼が言うように、障害者でもできるでなく、重い重複した障害を受けたからこそできる、という価値判断をこれからの重複障害教育がより深めていけるだろうか。

さらに、彼に続いて母親が、今年の初夏の頃、彼が盲人の牧師さんに出した手紙について話した。彼女はこの手紙を盗み読みしてあとで怒られたが、とてもいい文章だったのでノートに書きとめておいたとのことである。それを暗記して以下のように話した。

「6月になって僕の部屋にも蚊が飛んでくるようになりました。今、蚊取り線香をつけたところです。このほのかな香りは僕に遠い過ぎし日の年々の夏を思い起こしてくれます。僕は8歳の夏を音と光に囲まれて迎えました。そして17歳の夏は音とともに迎えました。そして今年18歳の夏は……。しかし、このほのかな香りは、僕にしみじみとああ僕は今生きているんだあという実感をよびおこしてくれます。現在僕がこういう状態になっても落ち着いているということを周りの者が不思議がります。これは非常に不合理なことに思えるのですが、それは事実なんです。僕は幼いときから、片眼、両眼、片耳、そしてついに両耳をやられました。その間の僕の苦しみは、その間の僕の心は、かたときも落ち着いたことがありません。この現在、どん底のこの状態になって、やっと僕の心には静寂が戻ってきたような気がします。この僕の体験は貴重なものだと思います。僕が現在こうなったということは、何か大きな意味があるのではないかと思います。僕は二重障害になったといいましても、見ることも、聞くことも経験させていただきました。僕は現在のこの苦しみを何かに役立てたいと思います。」

盲ろうとなって、失ったものもあるが得たものもあるという。そして、失ったほうがよいものを失い、得なければならない大切なものを得たとすれば、私のように捨てたいものを捨てきれず、本当に大事なものを得てない者が、むしろ彼はしあわせだ、うらやましい、盲ろうになってよかったと思ったら、それはいけないことだろうか。さらに私もまた盲ろうになりたいと願ったら、それは修行の足りない者のあさはかな思い上がりというべきであらうか。ともかく、蚊取り線香のにおいをかいで、今生きているんだなあ実感するこ

とは、やはり大事なことではなかろうか。

彼は耳が聞こえなくなったのにはっきり話せる。笑い声も大きくなり、調子もくずれてない。不思議に思って彼に聞いたら、聞こえなくなっても自分の発声はここで響きますと言って耳下腺のあたりを触った。

人の体は不思議なもので、考えられないほど沢山の活用の可能性をふくんでいる。ところで、彼のように私達に話してくれれば理解できるのだが、もし寝たっきりで、大小便たれ流し、日常生活は全面介助、もちろん言葉はないという障害の重い子供が、声には出さないが私達に語りかけ、それを聞きとれない、理解できないために重複障害教育としての新しい道をひらけないのだとしたら、ことは重大である。この子はどんな障害を受けているのか、それによってどんな行動の遅滞が起こっているのか、ではどうすればいいのか、という今までのようなありきたりの教育法では、どうしても障害が重くなればなるほど、何もわからない子、どうにもならない子、に見え、教育のきっかけがつかめないまま、暗中模索の状態が続く。障害を見出し、重たいと考え、行動遅滞の面ばかり目だたせ、人間としての全存在を見つめようとしないうし、人間存在の本質を考えようとしなければ、教育に行き詰まっている今日の事態はより深刻となり、一方的、独断的、偏見に満ちたかわり合いが横行し、子供の本当の姿をますます見失って、無駄な努力を繰り返すのではあるまいか。発想法の 180 度の転換が大切である。

重複障害教育の最も緊急の課題は、新しい立場に立って、現実に当面している障害の重い子供の本当の姿を見通し、人間行動の成りたちの原点において、教育的なかわり合いを地道に積み重ねることである。そのためには、障害や生活などのその子を見通しについてのくだらない考え方をサラリと捨て、障害の重い子供を育てるために最も大切な、より深い人生の基準を確立することである。

とくに、障害が重く、暦年齢が進んでも、行動の水準が永く初期の状態に留まっている子供の場合、その子の外界へのかすかな働きかけとそのもつ重い意味を理解することは決してなまやさしいことではない。しかし、思いを新たにしておく考え、工夫し、きちんと働きかけをすれば、その子は目を見張るような生き生きとした変化を示す。そして今までの発達に対する研究より、より初期の人間行動の成りたちの原点と、そこから行動の形成の仕組みに関する研究が今後重要であり、それをとくかぎは重複障害教育以外にありえない。

寝たっきりの子供に対する最初の働きかけは、その子の体を起こし、姿勢を変化させることである。姿勢を変化し、新しい姿勢を保持するために、外界刺激の受容の高次化が必要である。とくに、寝たっきりするとき、背面および側面にあった触刺激が、体を起こしたときに急に消えてしまうので、不安定な状態となりやすい。それを安定化するために、かわりの触刺激受容の高次化およびそれを土台としての視聴覚的受容の高次化をもたらすことが、姿勢の変化のための私達の働きかけの最初の問題である。

ヒトは外界刺激の処理において、まず触覚刺激の処理、つまり触覚的受容から視聴覚受

容の高次化へとつないでいく形成の道筋があり、これを無視することはできない。さらに、永く初期の状態にとどまっている場合、受容が受け身で反射的、固定的、自己刺激的状態に固着している場合が多いので、これらの受容を自発的運動につないでより高次化し、選択的、課題解決的な、運動を統制するための受容へ、と導くことが次の課題になる。

その子の外界への働きかけが、とめどもない、パターン化した運動の繰り返しから、やがて、始めと終わりが生じ、運動の停止とその復元が可能になったとき、その子は子の人格として外界に自主的、意図的、操作的に相対し、運動を自発的にコントロールし、予測、探索、課題の設定、運動の開始、方向づけ、運動の持続と調節、終了、確認、のまとまりのある行動によって、人間行動の成り立ちの原点が形成されたといえる。そのために、まず、持つこと、触ること、ついでに聞くこと、見ること、とくに、ヒトがなぜ持つのか、どうして見える状態から見ることへと変化するのか、見ることは持つことと触ることにどう関係しているのか、という初期の人間行動のいくつかの基本的問題を次々に解明しなければならない。

手を伸ばす、取る、持つ、置く、は人間行動の成り立ちの基本であり、ヒトが感覚を活用して運動を調整し、外界に操作的に働きかける出発点といえる。さらに、分化と統合、位置づけ、順序づけ、変換と組み合わせなど、より高次の人間行動の諸問題の解決に迫られているが、これらはすべて単なる教育の技術の問題ではない。そして、F君の手紙にあるように、かたときも落ち着かなかった苦しみのなかで、沢山のおもい違いや無駄な努力の繰り返しや、全く見当はずれの思い上がりのなかから、その子の示すかすかなしぐさのなかに、僅かではあるがずしりと重い語りかけをふと聞いたとき、私達の目は急速にひらけ、この教育にとって本当に大切なことは、夢とロマンと現場の工夫であることがしみじみと実感される。